学　会　記　事

第46回新潟脳神経外科懇話会

日　時　平成17年6月4日（土）
午後1時～午後5時
会　場　朱鷺メッセ
3F　小会議室（303）

一　般　演　題

1　小児脳腫瘍におけるフルオレセイン術中投与摘出術の有用性

高橋　英明・吉村　淳一・西山　健一
宇塚　岳夫・斉藤　明彦・田中　隆一
新潟大学脳研究所脳神経外科

【目的】Fluorescein sodium（FNa）は術中に静脈内投与することで画像上のCE病変を黄染させ,脳腫瘍の摘出に有用と考えられる．本研究では，小児脳腫瘍に対してその安全性と有効性を検討した．

【方法】対象は入院加療した小児脳腫瘍225例のうち摘出術の際にFNaを投与した36例である．年齢は1ヶ月児から15歳，平均9.1歳である．組織は，神経膠腫33例，胚細胞性腫瘍2例，神経鞘腫1例である．神経膠腫の内訳は，悪性星細胞腫9例，良性星細胞腫5例，髄芽腫8例，上衣腫8例，その他5例である．FNaは10mg/kgBWを静注した．

【結果】1）36例全例に重篤な副作用は認めなかった．2）36例中3例は染色性が乏しく無効であった．3）無染例は，CT上増強効果が淡く，石灰化を有する症例であった．4）濃染9例，中等度15例，淡染9例で，MRIやCTの造影剤増強部に一致する染色性を示した．5）用途での検討では，腫瘍の局在診断としてが12例（33％），摘出目標としてが18例（50％），深部腫瘍へのガイドとしての使用が6例（17％）であった．さらに摘出術に際して，残存腫瘍の描出が7例（19％），境界面として摘出をすすめたのが7例（19％）で，重要領域に対するfire wallとして10例（28％）が手術戦略上の役割として用いられた．

【結語】小児脳腫瘍手術に際し，FNaの静脈内投与がCE病変を認識する上で安全かつ有用であり，腫瘍の局在，手術の方向性や境界の決定など手術戦略に極めて重要な役割を果たすことが示めされた．

2　診断・治療に難渋した髄膜炎の1例

渡邉　　徹・小山　　京・本田　吉穂
水原郷病院脳神経外科

症例は69歳の男性．平成8年，左椎骨動脈閉塞症による左後下小脳動脈領域の小脳梗塞に対し，左後頭動脈ー後下小脳動脈吻合術を施行．以後外来にて抗血小板療法をおこなっていた．平成17年正月頃から歩行時のふらつきを自覚して来診．神経学的に巣症状に乏しく，MRI，SPECTでは明らかな新生病巣は認められなかったが，3DCTAでは左後下小脳動脈の描出が不良であった．後頭蓋窩脳循環障害を疑われ，精査目的に1月17日入院した．入院時意識清明で，体幹失調によるふらつき以外に巣症状に乏しかった．一般血液検査では低ナトリウム血症（128mEq/dl）と糖尿病を認め，また胸部のレントゲン写及びCTでは左肺野に腫瘤陰影を認め，肺癌が最も疑われた．入院後38℃台の発熱，意識障害，不穏傾向が出現，増悪したが，原因を特定できなかった．入院8日目に，肺癌の鑑別診断で施行された血清クリプトコッカス抗原が陽性と判明し，肺クリプトコッカス症と診断された．意識障害の原因としてクリプトコッカス髄膜炎が疑われたため髄液検査をおこなったところ，単核球優位の細胞増多，蛋白上昇，糖の著明な低下があり，墨汁染色でクリプトコッカスの菌体が多数認められ，クリプトコッカス髄膜炎と診断された．アンホテリシンB，5-FC，フルコナゾールを組み合わせて投与したところ，髄